

小学校国語科における 論理的な文章作成の指導法に関する検討

－ 思考ツールを用いて －

学籍番号 179975

氏名 龍田愛

主指導教員 寺嶋浩介

1. 実践研究の目的

国語科における論理的な文章作成の指導について、科学的根拠にもとづいて計画・実施・検証を行い、他の教師や場面に対する適用可能性を示したいと考えた。そのため、本研究では、目標である「論理的な文章作成」の効果的な実践の在り方を、近年、実践の場で注目されるようになってきた「思考ツール」に着目し、認知心理学の知見も援用しつつ、検討していく。

2. 思考ツールを活用した授業実践

2.1 授業実践1「未来がよりよくあるために」

思考ツールは、図形に児童の頭の中の情報を書き入れることで、思考を整理し、表現することができるツールである。思考ツールを使った場合は、使わなかった場合に比べ、児童の思考を手助けする何かをもたらしているといえる。そこで、授業実践1では、思考ツールが児童の思考を手助けする要因として、考えられるものは何か、を分析する。その上で、思考ツールには、どのような価値があるのかを検討する。

実践結果から、文章を書く際、思考ツールは、その内容や順序を整理する上で有効なツールであるといえる。枠組みに示されている内容は「問い」になっており、書き手は、空欄を埋めるために、自然とその「問い」に答えていくことになる。内容や順序などの修辭的な知識について、未発達である書き手にとっては、この思考ツールが内容を精選し、よりよい順序を示す指針として役立っているのではないかと考えられよう。

2.2 授業実践2「かんさつ名人になろう」

当該校の教員の提案を受けて、同じ単元から、筆者が計画していた思考ツールと、当該校の教員によって提案された思考ツールの、2つの種類が生まれていることが明らかになった。従って、筆者が考案した思考ツールと、当該校の教員が作成した思考ツールを比較することを通じて、文章作成のために使用される思考ツールの本来のあり方について、明らかにすることとする。

実践の結果、①実施した授業は、結果で見たように、全ての児童が記入することができ

るものであり、児童にとっては負荷の小さいものであった。児童が容易に書くことができたのは、knowledge-tellingモデルで書くことまでを養成している授業であったからではないか、と考えられる。

授業の中で、knowledge-tellingモデルで終わってしまったら、knowledge-transformingモデルで書くことができる、熟達者を育てることはできないであろう。つまり、初心者に対し、思考ツールを使用して、文章が書けるよう、児童の思考の活性化を促すことが、knowledge-transformingモデルで書くことができる、熟達者にしていくことになるのではないか。従って、2年生においても、knowledge-transformingモデルで書くことができる、熟達者を目指し、育てていく必要がある。そのために、児童にとっての認知的負担が大きいとされる「Ⅱ情報の選択」や「Ⅲ構成を考えた整列」を補助する思考ツールが必要なのではないかと考えられる。

2.3 授業実践3「明日をつくるわたしたち」

本実践では、実践2で計画段階であった、knowledge-transformモデルで書く児童を育成する思考ツールを使って授業を行い、授業実践後、文章作成時における児童の思考（書き方）がどのように変化したのかを確かめたい。

実践の結果、本実践で使用した「問題解決ボックス」は、「Ⅱ情報の選択」や「Ⅲ構成を考えた整列」を補助する思考ツールであったといえる。また、事前・事後テストや、中間評価の結果から、児童の記述は大きく変化していたことが確認できた。従って、全ての児童を、knowledge-transformモデルで書く児童に変化させることができたと考えられる。

3. 思考ツールの有効活用に向けて

授業実践を行った当該校は、2017年度まで、研究教科は「国語科」ではなく、重点的な指導がされていたわけではなかった。また、思考ツールに関して、体系的な指導がされていたわけでもなかった。しかしながら、3つの実践結果を踏まえると、上記の報告は、どの学校でもできることであると考えられる。

また、授業実践3で明らかになったように、児童の持つレディネスは、文章作成において、大きな影響をもたらすものであると考えられる。従って、学年や単位によって、単発的に思考ツールを使用するというよりは、全学年において思考ツールを使用するよう、カリキュラムを作成し、児童のレディネスを積み上げていく必要がある。カリキュラムに基づいて、系統的な指導が行われることで、児童の学びが一時的なものにならず、定着することを期待したい。

さらに、授業実践3では、思考ツールとして「問題解決ボックス」に加え、「構成表」も使用していた。しかしながら、事後テストでは、「問題解決ボックス」のみを使用させたが、多くの児童は「構成表」がない状況でも、提案書を記述することができた。従って、思考ツールは、状況によって使い分ける必要があるといえる。

使用できる思考ツールは、1単元に1つでなくてはならないわけではない。個々の実態（レディネス）に合わせて、必要な思考ツールを選択できる環境を整えば、より多くの児童が文章作成を容易にすることができると考えられる。特に、学習に支援が必要な児童には、個別に別の思考ツールを提示するなどすれば、40人学級においても、手の行き届いた指導ができるのではないかと考えられる。